



真保祐一著、文藝春秋社

出版社 / 著者からの内容紹介

50年前、殺人の容疑で逮捕された祖母と無実を信じる祖父の間で交わされた手紙には、誰も知ることのない真実が語られていた

トーマスの書評

最初は戸惑った。結局、本一冊すべてが手紙のやりとりに終始しているのである。この作家の過去の本、特に、最高傑作の「ホワイトアウト」を感動して読んだひとりからすると違和感がある作品である。登場人物はたったの4人である。現代の夫婦と、その妻の祖父祖母の手紙である。

読み始めてしばらくは、いったいどういう展開になるんだろうと面食らった。作者の意図が分からない。最初は、平凡な夫婦の話のように思えた。不倫のうえに結婚したが、倦怠期に陥った夫婦。夫は、必死にもとのさやに戻ろうとしているが、妻は別れたがっている。

しかし、途中から、それは変わった。読んでいくうちに、本の中に吸い込まれていく。最初は、男と女の感動的な恋愛物と思っていたが、いつのまにかミステリー的な要素が加わってくる。祖父と祖母の話は、純愛を信じた読者からすると、裏切られた気もするが、それでも面白さを消すにはいたらなかった。

最後は、通勤電車で読みきれずに、電車を降りたあとも、立ち止まって一気に読んでしまった。さすがに真保作品である。